

## News Letter vol.38 2012.3.16

### ロシア科学院動物学研究所へ訪問して

派遣国名：ロシア連邦

受入機関：ロシア科学院動物学研究所

派遣期間：2012.2.14～2012.3.1

私は2012年2月14日から3月1日まで、本プログラムのご支援を得て、ロシアのサンクトペテルブルグにあるロシア科学院動物学研究所へ訪問し、ハナバチ類の分類研究を行ってきました。ハナバチ類とはハチ目昆虫の一群で、寄生性のものを除き、親蜂が主に子の育仔のため、花から花粉や花蜜を集めるという習性をもっています。そのため、植物の受粉に大きく関わることから、ハナバチ類は生態系の中で重要な役割を果たしている昆虫といえるでしょう。現在、私は「アジア規模での生物多様性観測・評価・予測に関する総合的研究」というプロジェクトに関わっており、このプロジェクトの中で、先ほど述べたハナバチ類を扱った調査・研究を行っています。プロジェクト遂行のためには、アジアの中で、どこにどういった種のハナバチ類が生息しているのかという基礎的な情報の蓄積が必要なのですが、海外となるとそう簡単ではありません。幸い九州大学には東アジアから中央アジアにかけてのハナバチ類標本が多数所蔵されており、主にこのコレクションを活用させていただくことで、種の情報を集めることができます。しかし、この膨大なコレクションも、多くは種の同定まで済んで整理されているわけではなく、活用するためには、種の同定を行わなくてはなりません。今回、訪問した研究所にはヨーロッパから東アジアにかけてのハナバチ類の模式標本や同定標本を数多く所蔵しています。そこで、私は大学にある東～中央アジア産ハナバチ類の同定を目的として、厳寒期のロシアへと旅立ちました。



ネヴァ川流心部から見た動物学研究所

短期間の滞在ではありましたが、それでも多数のハナバチ類を種まで同定をすることができ、いくつかの種では、もう少し今後の検討が必要ではありますが、まだ名前の付いていない新種の可能性がある種も発見することができました。また、多くのアジア産ハナバチ類の標本を調査することができ、文献でしか知り得なかった各種の形態的な特徴というのもよく理解することができたため、今後、アジア産ハナバチ類の分類研究を進めていく際にも、大変、有意義なものとなりました。さらには研究所のハナバチ研究者との交流関係を築けたことも、今後の研究の進展に大きな財産となりました。2月のロシアは、想像していたとおり、大変寒さが厳しいものでしたが、雪国育ちではない私にとっては、ある意味これも貴重な体験となりました。

未筆ではありますが、最後に本プログラムにおいてご支援いただきました先生方やスタッフの皆様から心から御礼申し上げます。



雪と氷に閉ざされたサクトペテルブルグ市内